

## 関西サロン 2月例会報告

【日 時】2006年2月10日（土）16：00～18：30

（→その後「ラッセホール」にて懇親会。～21：00）

【会 場】ユーハイムホール（神戸市中央区）

【テーマ】西ドイツからドイツまでワールドカップの旅

【発表者】賀川浩（スポーツライター

）

【参加者（会員）】 井上俊也、牛木素吉郎、梶田孝史、名方幸彦、中塚義実、本多克己、宮明透、宮川淑人、室田真人（以上9名）

【参加者（未会員）】 阿部博一、伊田翔平、伊藤禎治、伊藤雅範、大黒裕之、川村優、古賀康彦、貞永晃二、杉森圭介、須田三友紀、高田敏志、高原渉、竹内宏一、竹山友陽、辰巳陽平、長井敏勝、中曾千鶴子、永田淳、根本いづみ、疋田晴巳、平田生雄、前田賢二郎、松本昌則、森弓子、山下陽一、米田和真（以上26名、その他3名）

【報告書作成者】根本いづみ

関西サロン

西ドイツからドイツまで ワールドカップの旅

賀川浩（スポーツライター）

<目次>

1. ユーハイムとドイツと
2. 74年から06年へ
3. ユーロ2004の取材を断念して
4. 日本の敗退と国内の停滞ムード
5. ベッケンバウアーの成功 ～選手、監督、そして組織委員長として～
6. 質疑応答

■はじめに 関西サロン開催にあたって（中塚先生）

1997年4月、お茶ノ水女子大の体育教官室でスタートしたサロンの月例会も、今年の3月で第125回を迎えます。

会場は、たいていは東京近辺。地方でもときどき「出張サロン」と称して行なっていて、関西でも開催したことがあるのですが、各地域の人が主体となったのをやりたいねと、ずっと話してきました。

それが実現したのが、今回の「関西サロン」。東京での、体育教官室とは違ってこんなに素晴らしい会場

で、たくさんの皆さんにお集まりいただき、本当にありがたいことです。

今日は私自身も、賀川さんのお話とともに、ここでどんな方たちに出会えるのかを楽しみにしてきました。演者の話と、人のネットワークが、サロンの大きな柱です。これをきっかけに皆さんもぜひ、東京でのサロンに参加していただきたいと思っています。

## 1. ユーハイムとドイツと

「サッカーでは何でも起こる」「Anything can happen in a football.」 そう言ったのは、デアバル（元・西ドイツ代表監督）だったかな。

当初の話では、今日は、20人くらいで丸テーブルを囲んでお茶を飲みながらということで、座談はもっとも望むところと思っていたのだけれど、フタを開ければ30人以上。まさに「何が起こるか分からない」ですね。

さて、今日の会場のユーハイムは、講演のテーマのドイツとも関係があります。神戸という街は外国人——なかでもヨーロッパ、英国やドイツ系——が多くて、貿易商を営んでいたウチの父親も、最初はドイツの商社に勤めていたんですよ。

第一次大戦中は、捕虜によってベーターベンの第9などさまざまな文化が持ち込まれました。ドイツの軍港おであった青島（チンタオ）で捕虜になったドイツ人の中に若い菓子職人がいて、彼は戦後も夫婦で日本にとどまり、神戸で洋菓子屋をしていた。それがこの「ユーハイム」です。

そこになぜ、私の神戸一中（兵庫県立神戸第一中学校／現・神戸高校）時代のサッカーの先生・河本春男さんが来ることになったのか——。

河本先生は東京高等師範（現・筑波大）卒業後すぐ、昭和7年（1932年）に神戸一中の先生になってサッカーを教えはじめました。戦後には岐阜県の教育委員をしていたのだけれど、米国式教育の押し付けに反発して教職から離れてしまったんですよ。

それで商人の道へ入り、故郷である岐阜・高山の牧場からバターを神戸の菓子メーカーに売っていたのですが、ユーハイムの創始者、故カール・ユーハイムが病気になったときにエリーゼ夫人にその人柄を見込まれ、店を再建すべく、経営にかかわることになりました。

その河本先生も亡くなられて、今は、同じく筑波大出身の息子さん——大学時代は陸上競技の選手——が後を継いでいますが、ユーハイムは河本先生が社長時代に「ユーハイムスポーツ財団」というのをつくり、以来、神戸のさまざまなスポーツを援助してくれています。そういう繋がりもあり、初の関西サロンはユーハイムで、お茶を飲みながらするのが良いんじゃないかなということで決まりました。

日露戦争、第一次世界大戦までは、日本は国際法規に則って捕虜を大事に扱い、捕虜たちは収容所で比較的自由的な生活を送っていました。しかし第二次大戦では東条（英機）さんの『生きて虜囚（りょしゅう）の辱めを受けることなかれ』という戦陣訓により「捕虜になってはいけない」「捕虜になることは恥辱」という考えが広まり、日本は敵方の捕虜をぞんざいに扱うようになったのです。

先ほども申しましたが、第一次大戦中は外国人捕虜によりさまざまな文化が入ってきました。サッカーもその影響を受けたもののひとつ。広島大学や高等学校の連中は、坂東捕虜収容所（徳島県）から似島（にのしま）に移ってきた捕虜たちと試合をしたり、彼らに指導を受けていました。それが後の広島一中や広島高等学校のサッカーの興隆につながったのです。

昭和5年の極東大会で中国と初めて互角の戦いをした日本代表選手は、第一次大戦の捕虜にサッカーを教わった先生方の影響を受けたメンバー。牛木（素吉郎）さんの先輩で記者の中条一雄さんも広島高等学校でサッカーをしていましたが、その中条さんのはるか先輩の手島志郎さんなどがそうです。

そんな風に今回は、ドイツとは色んな縁があるなど改めて感じながら取材の旅をしました。

## 2. 74年から06年へ

### (1)数字で見るW杯の変化

牛木さんは70年のメキシコ大会から取材されていますが、私は70年は会社の都合で行けずに74年から。以来、9大会連続で行っています。

昨シーズンで現役を引退した元日本代表の城彰二君は、1975年生まれ。74年W杯西ドイツ大会のときはまだ生まれていませんでした。中西永輔君（1973年生まれ）で、1歳くらいかな。

この32年の間には、記者章も変わりました。82年のスペイン大会までは小ぶりで簡素だったのが、メキシコ、イタリア大会では偽造防止のために、横にプラスチックのプレートがついています。94年の米国大会からは、それが記者章に埋め込まれるようになりました。

変わったのはカードだけでなく、私の頭も、最初は黒々としていたのが段々と白くなり、その白いのも徐々に減ってきて…まあ、城が生まれてから現役を引退するほどの年月なのだから、私の髪が変化するのも当たり前のことですネ（笑）。とはいえ、変わったという点では、やはり日本が出場することになったことが一番大きいでしょう。

3 試合数についてももう少し説明すると、74年大会は16チームによる1次リーグの後、すぐに準々決勝—日本のメディアは「決勝トーナメント」と間違った使い方をしていますが—に入らず、各組上位2チ

ーム、計8チームによる2次リーグを行なったため、(前回大会までと比べて)38に増えています。おそらく、それまでのメキシコ大会(70年)などより入場者数も多かったはずですが、その後、82年のスペイン大会までは2次リーグを行なう形式で、86年からはまた、1次リーグ後、ノックアウトシステムに入るようになりました。

それから、最終的な数字はまだ出ていませんが、お金のことも少しだけ。

74年の入場料収入が日本円にして44億6,400万円で、テレビ・ラジオの放映権料が23億1,400万円、看板そのほか17億5,500万、総収入が87億でした。

それが1998年になると、放映権だけで227億円。西ドイツ大会の総額よりもはるかに多い。今大会は、放映権だけで98年の10倍になるようです。決算はこの4月に出てきます。

また、今大会と74年の大きな違いのひとつは、選手たちの年齢。スター選手を厚遇するクラブチームが増えたことで選手の息が長くなり、今はどのナショナルチームでも、能力も経験もあるベテランの良い選手たちが活躍している。それは今大会の1つの傾向でした。

たとえば、ユーゴは昔は共産国のアマチュア。29歳になると海外チームでのプレーが許されるという状況でした。しかし今はどの国でも若いうちから、そして30歳を超えても、優秀な選手はどんどん海外に出て行き高い報酬をもらってプレーしている。サッカー界全体の経済の厚みが、そんなところにも反映していますね。2年間の変化を数字で見ると(プロジェクト画像:1974年と2006年の比較)、まず、FIFA加盟国が140から205に増えていますね。これ以上増えてどうするんだろうという気がしないでもありませんが、予選参加国は90から198に。本大会の参加国数も16だったのが倍の32となっています。試合数は38から64に、得点は97から147へ。大会入場者数(74年:176万9,062人、06年:335万9,439人)は94年が一番多かったのですが、これは国土の大きさ、スタジアムの広さ、そして人口の多さによるものです。アメリカというのは移民の国ですから、あらゆる人種が各国から来ている。シカゴで行なわれた開幕戦のドイツ対ボリビア戦で、観客席から南米のボリビアの国歌がワッと聞こえてきたのには驚きました。みんな、各地から母国チームの応援に駆けつけたのでしょう。

## (2)交通事情と人の動きの変化

今回は300万人を超える人が観戦したのですが、74年の西ドイツの部分に旧東ドイツ、会場でいうとライプツィヒが新たに加わりました。

74年大会は、フランクフルトで開幕戦を見て、それから飛行機でベルリンへ向かいました。当時は東西ドイツには国交がなかったため、フランクフルト空港から西ベルリンのテンペルホフ飛行場へ入れるのはパン・アメリカン(BA(英国航空))で、ルフトハンザはダメ。便が少ないので、日本であらかじめ予約しておいて良かったなという状況でした。

そのフランクフルトの空港で、日本人の大学生が航空券を取りたいと掛け合っているのに遭遇しました。どうしたのか訊ねると、「ベルリンへ行きたいけれどチケットが取れない」と半泣き状態。「いったん決まった就職を、お父さんの許しを得て反故にしてW杯を見に来た」と。私は「お父さんに感謝せなアカンよ」と言って飛行機に乗ったのですが、74年にももう、そんな若者がいたんですね。

そういえば、このときの飛行機に元日本テレビのプロデューサーで元東京ヴェルディ 1969 社長の坂田（信久）さんが乗ってらして、当時関西でやっていた高校選手権を関東・首都圏に持っていきたい、日本テレビが一生懸命バックアップするから、という話を聞かされたことを覚えています。まあ、それは余談になりますが。

当時からドイツは鉄道が便利で、あのときの記者の割引は 30%くらいだったかな。今回ビックリしたのは、飛行機が逆に不便になっていたこと。74年は、ギリギリまで仕事をして、飛行機に飛び乗るのが非常に便利でしたが、今回は、手荷物検査が厳しくて…。いったん搭乗したのを、再検査のために全員おろされるなんてこともあって、こりゃあ電車の方が良いなと思ったものです。

それから、74年と06年で大きく違っていたのは国内の盛り上がり。74年はサッカーの大会をドイツのサッカー協会がやっているという雰囲気だったのですが、今回は、全世界のお祭りをドイツでやっているという感じ。スタジアムとスタジアムを行き来する人、スタジアムへと向かう人、パブリックビューイング等の催し物へ参加する人など、実際にスタジアムへ行った 300 万人の3倍、1千万近い人々がドイツ中をウロウロしているようでした。

また、今回、目に付いたのが、高額チケット（準決勝と決勝のセットで 150 万円等）の購入者や何十万というスポンサーの接待のためのテントとスタッフ。スタジアム周辺には観客やメディア、会場のボランティア、スタッフ以外にも大勢いて、とにかく混み合っていました。だから我々は駅からメディアバスで会場へ向かうだけで精一杯。それ以外はほとんど身動きがとれませんでした。

### (3)スタジアムの変化

次に、スタジアムの変化ですが、74年大会では、ベルリンは 1936年のオリンピックスタジアムにジュラルミンの屋根をかぶせただけ。ミュンヘンは、72年のオリンピックで使ったのと同じ場所でした。

ドルトムントは、日本サッカーの歴史にもちょっと関係があります。ここは、長沼健、岡野俊一郎、平木隆三といった現在の協会の大長老たちが学生時代あるいは卒業間もない頃、1953年に国際学生スポーツ週間（現・ユニバーシアード）に参加したときの会場です。

試合は開会式後の開幕戦、他の競技の選手たちも見守るなか地元のドイツ代表と戦い、大激戦の末に敗れました。しかし、シュンとして食堂へ行くと、試合を見てくれていた選手たちがスタンディング・オ

バージョンで迎えてくれたそうです。幸いにもここでスポーツマンシップに接した彼らは、以来、サッカーの世界から足を抜けなくなっただけで（笑）岡野俊さんたちは2002年にW杯を誘致するとき、彼らのフィロソフィーとして、この経験を申請書に書きました。

「ヨーロッパで本当のスポーツマンシップを知った。それを精神として、私たちは日本で素晴らしい大会を開催したい」。

このときは、竹腰重丸さんが団長、慶応出身の松丸（貞一）さんが監督で、牛木さんの先輩の大谷四郎さん（東大出身）がコーチでした。大会後、53年の選手たちは1ヶ月半にわたりヨーロッパ各国を遠征。ロンドンやパリ、ユーゴ、スウェーデンを周り、サッカーと文化を満喫してきました。

いつだったか長沼健さんはそのことを「あ那时的先輩たちは、私たちによくあんな贅沢をさせてくれましたねえ」と話していました。選手はそれぞれ20万円を負担しました。費用は各選手の出身の地方協会や出身校などが工面したもので、関大の岩田（淳三）君の地元では、町始まって以来の海外に行く選手だからと、町をあげて募金を実施したそうです。

そうして海外で勉強してきた彼らが長いあいだ先頭に立って日本サッカーを引っ張ってくれています。まあ、ちょっとゆっくりしすぎだと悪口を言う連中もいるようですが、それでもやはり、よくやってきてくれたと、そう思っています。

74年は、ドイツのスタジアムの充実ぶりを見て、帰国後に日本の現状にガッカリしたものです。

しかしその後、日本も2002年にW杯を開催して、多少なりとも専用スタジアムができたし、アフリカから来る出場国にも芝生の練習場を用意するとか、そういうことを皆の努力でまがりなりにも実現できた。そう思っていたのですが、今回32年ぶりに行ったら、また改めて…！ ミュンヘンの贅沢極まりない新スタジアム、1936年の五輪のデザインをあえて残したベルリンのスタジアムなど、どこも、「さて、どう調理してやろうか」という雰囲気だね。ニュルンベルクのスタジアムの外側にはナチスの広場があったわけですが、そこもまた、記念碑としてそのまま残されていました。

また、ベルリン五輪のときの、聖火リレーが入ってきた入口もそのままでした。当時私はまだ小学6年生だから、もちろん現物は知りません。それでも、レニ・リーフェンシュタールという女性の監督の『民族の祭典』（Fest der Volker）『美の祭典』（Fest der Schönheit）という立派な記録映画で見た映像や、先輩たちに伝え聞いた話のとおり残っているのを見て、感無量になりました。それから、スタジアムから鉄道の駅への道、外周の広さのスケールには、いつ見ても驚かされます。

我々にしてみれば、90年のイタリア大会が非常に贅沢なものだと感じたのだけれど、今回はそのさらに上。サッカーを楽しむために手を変え品を変え、これだけ色んなことをやるのかと思わされた。余裕があるのか、あるいは依然として差があるのか…。

まあ、差と言っても74年の時ほどではないですよ。だけど「ドイツのお手並み拝見」というつもりで行ったのが、「明後日来い」と言われたような感じではありましたね。

### 3. ユーロ2004の取材を断念して

今回、自分自身で「しまったな」と思ったのは、2004年にポルトガルで開催されたユーロ（欧州選手権）に行けなかったことです。

74年の私は、会社に1ヶ月以上の日数をもってサッカーに費やすことが最大の目的。72年欧州選手権のドイツ代表チームはテレビやニュースでしか見ていないし、ヨーロッパの試合といえば、アヤックスとバイエルン・ミュンヘンが戦った欧州チャンピオンズカップ（現・欧州チャンピオンズリーグ）をテレビでチラッと見たくらいでした。

だから、当時、われわれ日本代表の中で最もパワフルな釜本をオーストラリアの記者が「エレガント」と表現していたのを聞き、「フン、何を言ってるんだか」と思っていたのですが、74年の開幕戦、ブラジルとユーゴの試合を見て、その意味を初めて理解しました。

それ以来、80年のイタリア、84年のフランスとずっと、会社を抜け出して見に行くようにしていました。W杯の2年前に欧州選手権を見ることで、ヨーロッパの、そしてヨーロッパでプレーする選手の強さというものを体で感じ、また、新しい選手の台頭やベテランの調子を自分の目で確かめていました。

それが、今回は80歳という大台に乗り体が本調子でなく、取材申請をしながら断念してしまった。

日本については選手たちも、代表戦も日常的に見ているし、アジア勢もある程度チェックできる。南米はある程度、どこが強いかわかっているし、個性豊かなさまざまな選手をどうまとめてくるかというところでしょう。だけど、ヨーロッパといういわゆるホームグラウンドで戦う彼ら（欧州勢）をチェックできていなかった。もちろん、ヨーロッパのクラブチームの試合は見られるし、それはそれで面白いけれども、ナショナルチームはまた別物。それをナマで見ておかなかったので、今回もまた、「これはアカンな」と開幕戦（ドイツ対コスタリカ）を見て感じました。

実際に体と体が当たった時の衝撃や、前に出て行くときの強さというのは、上（スタンド）から見ているだけではわからないものですが、それにしても違っていた。

開幕前の日本とドイツの親善試合。日本は2点リードしたけれど、それで本気になったドイツが2点を返して試合は引き分けに終わった。日本でテレビで見ていた私は、追いつかれた時に「ここでもう1点奪って突き放す力が日本にあれば…」なんてことを思ったわけです。しかし、ドイツのW杯初戦を見た時に、そんなことをチラッとでも考えたのは、実におこがましい話だったなと思いました。

#### 4. 日本の敗退と国内の停滞ムード

この 32 年間の一番大きな変化といえば、日本代表が本大会に出場するようになったことですね。

激烈な予選を勝ち抜いての 98 年初出場から、02 年の日韓大会、そして今大会。出場権を得るまでの予選の過程が面白く、国内ファンも非常に盛り上がりました。その背景にはもちろん J リーグの成功もあったけれど、やはり第一は国際試合で勝つことです。

しかし今回、その熱が少々過剰になったのかもしれない。

第 3 戦でブラジルに敗れて敗退が決定、さらには中田英寿が引退した。その頃、とある新聞の社会部から「日本のファンはもう静まり返っています。この暗い気分を吹き飛ばすような話は何かありませんか」と電話がありました。

W杯へ来ることだけでも世界から見ればすごいことなんだから、ここで 1 回、2 回負けたって、どうってことないですよ。戦争じゃないんだし、負けたからって捕虜になるわけでもないんだから（笑）。勝つこともあれば負けることもある。本大会に出られることも、出られないこともある。それも面白みなんですよ。

W杯には何十年という歴史があつてね、サッカーの母国のイングランドですら出ていない大会があるし、ドイツやブラジルのように毎回勝ち上がるチームは別格。“無敵艦隊”と言われるスペイン——無敵艦隊の語源となっているスペインの大艦隊は、後に小型船のイギリス海軍にやられて沈んじゃったわけだから、そもそも非常に失礼な話だと思うんだけど（笑）——だって、世界屈指の国内リーグ（リーガエスパニョーラ）を持っているけれど、W杯では思うような成績を残せていない。そのことを考えれば、我々はそう悲観する必要はないですよ。むしろ、戦った相手の技術が高く、体格も立派なんだから、その彼らに勝つためにはどうしたら良いのかということを考えて、選手を励まし、コーチ陣の尻を叩いてやればいいんです。もちろん、専門家たちは今回の結果を分析して対策を考えなければいけませんかね。そんな話を、その記者にはしました。

初めて出場した 98 年フランス大会では 1 点しか取れずに帰ってきて、城は戦犯のように言われたけれど、あのときだって、「日本のサッカーはすごく面白い。どうしてあんなに早く、細かく動けるんだ」と言ってくれたフランス人がたくさんいたんですよ。それから相当上のレベルの人たちも「創造性もある」と評価してくれた。

2002 年は日本の蒸し暑い気候を味方にして、ちょっと成績が良すぎた感がなくもないのですが、まあ、皆の頑張りのおかげでもあります。



06年大会は、札幌くらいの気候風土だと思って行ったら、予想外に暑かった。その暑さが、日本のような湿ったものではなく乾燥したものだったから参ってしまったのでしょう。

印象的だったのは、第2戦のクロアチア戦でPKを与えた場面。普通ならGKの川口のところへ行って「頼むぞ」と声をかけるものなのですが、このとき日本の何人かの選手は川口に声もかけずに水分補給へ走った。あのシーンを見たとき、「今日は本当に乾いているんだな」と思いました。

日本の選手も今はたいていのことは経験しているはずですが、あの暑さ、渴きは相当堪えたのでしょう。（中村）俊輔も体調がイマイチだったし、そういう意味では、たしかに今大会は日本にとっては残念なものでしたが、私にとっては、何だかんだケチをつけながらも、やっぱりW杯は面白いなど。そう感じた大会でした。

## 5. ベッケンバウアーの成功

～選手、監督、そして組織委員長として～

今大会で私が最もうれしかったのは、ベッケンバウアーが成功してくれたことです。

彼は、1966年のイングランド大会では決勝でイングランドに敗れて準優勝。70年メキシコW杯の準決勝・イタリア戦では負傷した腕をつりながら出場するも敗戦、結局3位でした。そうして74年。ドイツ代表のキャプテンを務め、いよいよ優勝かというときに天下のクライフとミケルスのオランダ代表が現れた。オランダ代表はミケルス監督のもと、いわゆる“トータル・フットボール”を仕上げてきました。それが新しいサッカー、現代のサッカーの始まりです。

もちろん、70年のペレのブラジルチームもすばらしかったですが、今日のように全員が動くという形ではありませんでした。

ベッケンバウアーが何かのときに「今の観客が私たちの時代のサッカーを見たら、みんな（つまらなくて）眠っちゃうよ」と笑っていたけれど、それでも、このときのオランダ代表は印象的で、そのオランダを破ってベッケンバウアーたちは優勝したのです。

74年に28歳だったから、78年は32歳。まだまだ代表選手としてやれるレベルにあったのですが、アメリカ移籍の問題などがあり、また、ベッケンバウアーの2つ下のクライフも——彼は変わり者だったから（笑）——欠場。78年はペレが退いた後にスターとなるべき2人の選手がそろって出場しなかったため、ケンペスのアルゼンチン代表とオランダ代表が戦って、アルゼンチンが優勝しました。

その後ベッケンバウアーは86年大会で監督を務め、決勝でマラドーナのアルゼンチンに敗れて準優勝。しかしその次の90年大会は、同じくマラドーナのアルゼンチンを、ベッケンバウアー監督とマテウス・キャプテンの西ドイツが破り、彼はキャプテンとして、そして監督としてもW杯優勝を果たした。その彼

が、今度は組織委員長という形でW杯に関わったわけです。

以前、バイエルン・ミュンヘンの実権を握っていたウリ・ヘーネスがこんなことを言っていました。

「バイエルンでもドイツ協会でも、ベッケンバウアーという存在は本当に大きい。自分たちが走り回ってお膳立てをして、ここぞという時に彼が出てきてくれれば解決する」。

今大会も、ベッケンバウアーのゴールドフィンガーによって大会が成功したと書いた新聞がありました。

そもそも招致の時点で、票数が割れていたのが、オセアニアの理事が棄権したことによって開催がドイツに転がり込んできた。大会期間中も、決勝戦の前にベルリンに大雨が降ったのだけれど、当日はカラッと晴れた。ドイツは優勝はできませんでしたが、3位という好成績を残してドイツ国民は大喜び。ベッケンバウアーは組織委員長として結果を残し、大会は大成功のうちに終了しました。

## 6. 質疑応答

(1) 74年はなぜほとんどが陸上兼用スタジアムだったのですか？

イングランドのスタジアムはクラブの所有ですが、ドイツの場合、地方公共団体（国・州・市など）がお金を出して作られたもの。だからやはり、陸上競技にも使えるようにということになっていたのでしょう。

南米へ行くとサッカーのスタジアムしかないようなところもありますが、ヨーロッパの場合は、色んな競技のスタジアムがあるけれども、それでもサッカーのスタジアムがダントツに多いですね。

(2) 竹腰重丸さんが代表合宿で短刀を持ち歩いていたという話は本当ですか？

まずは、竹腰重丸さん（ノコさん）という大先輩について、皆さんに知ってもらうことが先ですね。1906年（明治39年）2月15日生まれで、去年がちょうど、生誕100周年でした。

東京の日本サッカーミュージアムの中に「日本サッカー殿堂」というのがあり、牛木さんも私も、長沼健さんを委員長とした殿堂委員会の委員を務めています。ノコさんはその第1回目の掲額者。

出身は大分ですが、中学生の頃に大連（中国）の学校に転校。そこでサッカーを始め、夢中になったそうです。中国人はサッカーが好きですし、大連にはロシア人も多くいましたからね。外国人との試合のなかで技を磨いたようです。その後、日本へ戻って山口高等学校へ進みました。

大正12年の関東大震災のとき、チョウ・ディンというビルマ人が日本でサッカーを教え始めたのですが、

ノコさんは押しかけていってその巡回指導にくっついて歩いてメキメキ上達したそうです。

そうそう。後藤健生さんが今回、「日本サッカー史～日本代表の 90 年～」という立派な本を出します。1917 年～2006 年の日本代表 90 年間の記録で、資料編と、それに注釈を加えたものと 2 冊。非常によくまとめられているので、みなさんもぜひ見てみてください。

ここにもあるように、日本代表というチームが試合をしたのが 1917 年（大正 6 年）。この年の第 3 回極東大会が東京で行なわれ、日本のサッカーも初めて出場しました。

極東大会は 1930 年（昭和 5 年）にも日本で開催されたのですが、このときは新しい明治神宮外苑陸上競技場を使っての大会ということで、日本サッカーにとっての一大イベント。「ここで頑張らなアカン」と、日本協会としては初めて東西の大学から選手を選んで選抜チーム——日本初のセレソン、本当のナショナルチーム——を作りました。このチームのコーチ兼キャプテンが竹腰重丸さん。

ノコさんは中心になってチーム作りをし、また、ロビング・センターハーフとして一番良く動き、働きました。

それで…そうそう、短刀でしたね（笑）。これは、武士の家の出のノコさんが自分の気を鎮めるために、お母さんからもらった短刀を眺めていたという話です。

ノコさんと同じ部屋に住んでいた関西学院大出身の後藤鞆雄さん（ベルギー人と日本人のハーフ、通称：ゴットンさん）が治太はん（田辺五兵衛さん）に、「ノコさんが夜中に短刀を見ている。気持ち悪くて寝られへん」と話したそうです。この世代の仲間内では有名な話で、私も聞いたことがあります。

そういえば田辺五兵衛さんはサッカー川柳というのを残しているのですが、そのなかにも「抜き放つ短刀に ゴットン 寝もやらず」というのがあります。

以上